

鬼を育てた風土 越後

高橋 実

はじめに

昔から随分多くの怪力乱神が越後の国からでていようだ。

伝説によると、酒顛童子（三島与板）を始め、茨城童子（長岡近辺森立峠）とか、彌彦の妙多羅婆さん或は郡池の主である蛇（古志吉谷にある）だとか、数え立てたら際限もない程多い。だからこそ、越後には、冷たい白魔までも跳梁するのだと聞かされたものだ。『越後の国雪の伝説』（昭和十七年）

この本の著者鈴木直氏は、こう述べる。「頼まれれば越後から米搗きに来る」というのは、越後人の人柄の良さ、人情の篤さをあらわす諺である。確かに越後人は、実直で、やさしく、頼まれればいやといえない人情家である。それらの性格は、半年雪に埋もれる風土の産物ともいわれる。「やさしさと甲斐性のなさが裏と表についている」と小林幸子も歌う。その越後は、酒呑童子、茨木童子をはじめ、弥三郎婆さ・黒鳥兵衛など恐ろしい鬼の出生地である。越後は、雪国のきびしい風土が忍耐強さや人情の篤さを産んだが、一面子供を攫って其の肉を食らう恐ろしい鬼をも産み育てた。これは、どう解釈したらよいのか。不思議なことである。本稿はその鬼を育てた越後の風土への大胆な考察である。

一、酒呑童子の古里

酒呑童子は、平安初期に越後の国蒲原郡中村に生まれ、丹波の大江山や、近江の伊吹山に住んだといわれる鬼の頭領で、本拠の大江山では、竜宮のような宮殿に住み、多くの鬼達を手下に引き連れて、しばしば京都の街中に繰り出しては、姫君を誘拐、拉致して生の肉を食ったりしたという。余りの悪行に、帝の命令で、源頼光や、渡辺綱を筆頭に討伐隊ができ、酒盛りの最中に「神便鬼毒酒」を飲ませ、体を動かなくして、寝首を搔いて成敗した。しかし、首を切られた酒呑童子は、頼光の兜に噛み付いていたといわれる。

その酒呑童子の出生地は越後といわれる。平安初期に越後国で生まれた彼は、国上寺（[新潟県燕市](#)）の稚児となった。（国上山麓には彼が通ったと伝えられる「稚児道」が残る。）^十二、三歳でありながら、絶世の美少年であったため、多くの女性に恋されたが、女性たちから貰った恋文を焼いてしまったところ、想いを遂げられなかった女性の恨みによって、その時の煙にまかれ、鬼になったという。そして鬼となった彼は、[本州](#)を中心に各地の山々を転々とした後に、大江山に棲みついたという。

明治の中ごろ旧越路町浦の大平与平治を中心に書いた『温故の葉』四編には次のようにしるす。

西蒲原郡弥彦莊砂子塚村南の入口に一の邸跡あり。其本館の跡とおぼしき処は酒顛童子

出生の旧跡にて耕地と成す。時は奇怪ありと言伝へ老樹繁茂せり。伝に桓武天皇第五の皇子桃園天皇故ありて当国に來り玉ふ時、供奉の一人否瀬某なるもの当地に館を構ひ近辺を所領し、数代住居せしが、一代善次米兵衛俊兼に至り、一子なきを憂ひ、信濃国戸隠山九頭龍権現へ祈念せしに、感応空しからず、其妻懐胎し十六ヶ月を経て男児出産す。外道丸と号く。美童にして聡明英智衆兒に超ゆ。俊兼故ありて同莊和納村へ居を移す。(村の入口に榎の老樹あり。此辺を童子屋敷と称す。又同村水田の内に童子田と云る名所あり)外道丸は、八才にして同村楞嚴寺へ通学せしが、人に逆らひ、悪行募りければ、寺僧にうとまれ、遂に寺門を逐はれたり。一説に酒顛童子出生の地は、中蒲原郡菅名莊矢津村と聞しが、這回同地方戸井田氏より最も正しき伝記を寄贈ありしにつき、併せて次編に詳しく掲ぐべし。(以上 四編)

前篇に記載せし如く酒顛童子は中蒲原郡菅名莊矢津村に生まれしと云ふ一説あり。今同地方の会友戸井田氏よりの報に依れば、童子が父は、藤原氏に出で相模国より矢津村(當時は谷津と書けり)へ移住せしものにて山崎次郎右エ門と云ふ豪農なりしが、其の妻初めて懐妊す。十五ヶ月にして分娩に臨み、病むこと七日、苦痛に死せり。嬰兒は母の体を破り出産せしを以て里人は鬼子なりと恐怖す。頃は天曆年中なりしと云ふ。容貌風儀頗る美にして父は最と寵愛せしが、齡八才の頃ほへは、体格殆ど十四五才の如く、姓来酒を嗜み酔ふ時は全身異なる赤色を呈す。性質ひようかん憑悍猛烈にして人と争ふことを好む。父は之を憂へ、屢訓戒を加ふると雖も悔悟の状なければ、愛情を断ち、一日欺きて山中へ誘伴し、断崖絶壁の上より溪間仙見谷川の蒼淵に抛落す。(里人此処を子抛げヶ鼻又は難越の鼻と云ふ。矢津村を去り南の方一里餘夏針と仙見谷両村の間にあり)童子は中間より身を転覆して、岸際の松木に倚り父を顧み、赤目吐舌一笑して叢林の間に隠る。父は憤怒し、搜索すれど、踪跡を得ず。家に帰れり。童子は翌夜帰り来て邸内の一隅に櫟二株を植而して父を呼び、我が行末を憂ふる勿れと飄然爰を去り、弥彦莊砂子塚村に至り、小川中将吉範(桃井親王供奉の臣)の家に食を乞ふ。曾て吉範に一子あり。外道丸と云ふ。十四才にて早逝す。夫婦は悲嘆に沈みしが、一夕神ありて一子を授くとの靈夢を得たり。丸死後十七日に遭遇し童子の容貌身体丸に彷彿たり。

夫婦は遂に養ひ、以て子とし、外道丸と名く。吉範故ありて後同莊和納村へ居を移すと云伝ふ。彼の童子が植置きし櫟は数百年の星霜を経て、廻り三丈八尺餘となる。(何の頃よりか二株の間へ注連縄を結び、神木と崇め、傍はらへ若宮八幡を勧請せしが、後年社は焼失せり。寛延三年六月領主堀家の記録に矢津村若宮八幡勧請の年月は未詳。社地東西十五間南北八間前々除地。但し社は無之大櫟二本有之と見ゆ)又童子の実家は代々山崎を襲ひ、次郎右エ門を通称とし、門葉数家に分れ、連綿相續せしが、一代次郎右エ門大酒を好み、追年破産に臨み、弘化年中或る商賈と謀り、彼の櫟二本共伐木して金に代ふ。此事領主堀家の聞く処となり、輸出を停め、倒木のまま柵を廻らし、保存せしが、後命じて村端早出川に投入す。彼の古木の切口より、芽出で成木し、今は廻り五尺以上となり、竹林の内に旧跡を残せり。次郎右エ門は、追々零落独身となりしが、安政三辰年四月何地へか脱

走して其の行衛を知らず、故に家名断絶す。又童子が母の実家と云ふは、同村山崎伊之吉の祖先より出で童子が用いし器物刀剣類を保存せしに、近年同家も断絶し其所在を知らず、尤も童子手植櫨の旧跡より次郎右エ門が代々居住せし邸地の跡は、凡五十間を距てり。偕童子が身の成行は次篇に委しく掲ぐべし。(以上五篇)

偕も童子は前篇に記せし如く蒲原郡和納の楞嚴寺へ通学せしが、人に逆らひ、悪行募りければ、寺僧にうとまれ、遂に寺門を逐れしゆへ、親は種々教誡を加ひしうへ、同郡国上の国上寺(当時天台宗にして楞嚴寺は同末寺なりしと云ふ)の侍童となせしに生長するに随ひ、大酒を好み、自ら酒顛童子と唱へ、猛勇を振ひ、特に色欲を逞ふし、師父の誠めを聴ず、暴悪日に増長しければ、同寺を逐はれしより、家にも帰る能はず、同山内東稲葉の窟に隠れ栖み、奇術を施こし、里民を脳ませしが、師父を憚かりしにや、此処を去り、古志郡輕井沢へ移りしに、当時同村茨木善次右エ門の家に生れし、茨木童子といへるもの、常に悪行を好み、村民に忌憎まれ、邸内の窟を栖かすとす。(茨木善次右エ門は有名の旧家にして、今尚ほ連綿相續し、童子が用いし二三の器物を保存せり。同家の背後に童子が栖し窟と云ふあり。近年破壊して其跡を残す而已。傍はらに名泉湧出す。此の続き田圃の中に、十坪許りの空地は童子が出生の旧地とて、往古より開拓を禁ずる所なりと云ふ)酒顛童子は同気相需め、交誼を厚くし、共に同地の大平山に栖を卜し近辺を横行せり。(以上六篇)

駒形さとし氏は、次のように記す。

丹波国(京都府・兵庫県)の大江山に鬼が住んでいて、近隣を荒らしまわり、人々に恐れられていた。その名は「酒呑(顛)童子」という。

池田中納言の娘が酒呑童子にさらわれたため、時の帝が源頼光に鬼退治を命じた。頼光は公(金)時ら四人の家来を従え、大江山で首尾よく退治した。

実はこの話の主人公、酒呑童子のふるさととは、越後の分水町であるというのだ。

西蒲原郡分水町地藏堂の近くに、砂子塚という所がある。昔、垣武天皇第五皇子の桃園親王が越後に赴き、この地に住まわれたことがあるという。

親王に従ってきた否瀬某という者が、砂子塚に土着した。その否瀬の子孫に俊兼という人がいたが、夫婦には子供がなかつた。そこで信州戸隠山の九頭権現に願かけをしたところ、十六カ月目で男の子が誕生した。喜んだ夫婦は、この子に外道丸という名をつけた。

ところが、この子は体格はいいし、悪知恵がよくまわるので、大のわんぱく坊主だった。手に負えなくなった夫婦は、岩室村和納の楞嚴寺に預かってもらうことにした。

だが、わんぱく小僧は、一向に修行に身を入れようとしないので、手を焼いた。和尚は、分水町の国上寺に預け、鍛えなおしてもらうことにした。

国上寺に移った外道丸は、心を入れ替えて修行に励むようになったが、何しろ生まれつきの美貌のため、村の娘たちからひっきりなしに恋文が寄せられた。しかし外道丸は、修行中の身であるからと封も切らず、たんすの中に入れて放しにしておいた。

ある日、山積みになった恋文を焼き捨てようとたんすを開けた途端、娘たちの思いがこもった恋文の束から煙が吹き出し、外道丸は恐ろしい鬼の姿に一変してしまった。

国上寺に居られなくなった外道丸は、空を飛んで丹波国大江山の山中に住みつき、酒呑童子と名のつて都や近隣を荒らしまわる盗賊の頭となった。そこで頼光に討ち取られることになるのだが、酒呑童子は倒れる直前、頼光のかぶとにガブリとかみつくなどして、最後まで豪傑ぶりを発揮した。

国上寺には、今も「酒呑童子絵巻」が聚宝蔵に常時展示さしている。

ところで、県内には、ほかにも酒呑童子のふるさとがある。中蒲原郡村松町矢津のお寺にいた小僧がやはり美男子だった。娘たちから寄せられた恋文を封も切らないで焼き捨てようとしたところ、娘たちの怨念をうけて鬼と化し、大江山に住みつき酒呑童子となるという、同種の伝説が伝わっている。

酒呑童子が大江山に向かう時、昼の弁当で使ったはしを地面に突き立てておいたところ、二本の大ケヤキに育った。その木の下に、いつごろからか酒呑童子の石のほこらが建てられた。二本のケヤキは、残念ながら平成四年の秋に切られてしまったが、石のほこらが残っている。

北蒲原郡中条町高畑に、昔、酒呑童子が住んでおり、村々を荒らしまわっていた。そこで村人は獅子頭を作ったかぶり、酒呑童子に立ち向かったところ、恐れをなして大江山へ逃げていった。これが村に伝わる獅子舞の起源であるという。

それにしても、越後と丹波を結ぶ酒呑童子伝説が、どういうことで生まれたのだろう・不思議な話である。『にいがたの怪談』〔駒形さとし著 新潟日報事業社 2004〕

酒呑童子は時に酒顔童子とも書く。この著者が言っているように、酒呑童子は、どうして越後から都に近い丹波に赴き、都の婦女子を攫って恐れられていたのだろうか。不思議なことである。大変な美男子が女たちの恋文の執念で鬼になってしまったというのも、不思議である。女の執念といえ、安珍清姫の例のように蛇になって安珍を焼き殺すように、女こそその責めをうけるべきなのに、なぜ被害者である酒呑童子が鬼にならなければならぬのか。酒呑童子には都に不満があったのではないかと考えざるをえない。

二、茨木童子

『日本伝奇伝説大事典』には、茨木童子について次のように記す。

酒呑童子の部下とされる伝説の鬼神。

歌舞伎の舞踊劇「茨木」（河竹黙阿弥作、明治十六年四月新富座初演）に登場するのが勇名。源頼光の四天王の一人である渡辺綱は、羅生門で切り落とした茨木童子の片腕を唐櫃にいれ、物忌みして誰にも会わないで居るところへ綱の叔母真柴に化けた茨木童子が訪ねてくる。いったん拒絶したものの、肉親の情に負けて家の中にいれてやり、たつての願

に唐櫃の腕を見せると、鬼神の本性を現し、腕をつかんで飛び去ってしまうと言う筋。能がかりの舞踊であるが、能を典拠にしているわけではない。

実は、これより早く、明治二年に杵屋勘五郎が作曲した長唄「渡辺綱館の段（綱館）」がこれとほぼ同内容であり、さらにそれは、寛保元年（一七四一）七月に江戸中村座で演じられた「兵四阿屋造」つむものあずまづくりがもとになっているので、これが原作といふべきである。

『平家物語』劔の巻に、渡辺綱が一条堀川の戻橋で、鬼女の腕を切るといふ話があるが、これが謡曲「羅生門」では戻橋ではなく、羅生門の鬼になり、近世になってこの鬼に茨木童子という名が与えられたものと思われる。

ここには、茨木童子の出生地について触れていないが、インターネットで調べると、「越後では古志郡の山奥の軽井沢（旧栃尾市）で生まれ、母親の胎内に十六ヶ月もいて、生まれるとき既に歯も生えていたという。弥彦神社に預けられたとも言われる。非常な美青年で、多くの女性に言い寄られ、多くの恋文が寄せられた。その恋文をしまいこんだつづらを開けると、鬼の姿に変わっていたといわれる。また、髪結い屋に預けられ、剃刀で客を傷つけ、あわてて指で拭いたが、それ以来、血の味が忘れられず、その店は悪評が立ち、寂れてしまった。丹波山に逃げ込み、酒呑童子の家来になった。平家物語では、堀川にかかる一条戻り橋で酒呑童子を退治した渡辺綱が、通りかかった美女を馬に乗せてやったところが、鬼の本性を現し、綱の髪を掴んで連れ去ろうとした。綱は、慌てず、名刀髪切丸で鬼の課厚手を切り落とし、難を逃れた。切り落とした鬼の腕を頼に見せると、陰陽師阿倍野晴明に相談する。清明は一週間の物忌みをするようにいう。その物忌みが終わる前日、綱の叔母真柴が屋敷を訪ね、鬼の腕を見たいという。封印された唐櫃から出された腕を手取るや茨木童子の正体を現して空の彼方へ飛び去ったという。その童子の出生地は、栃尾市のほかに、兵庫県尼崎市とも言われている。また大阪府茨木市では、茨木童子の出生地として、中央通の高橋に鬼の石像が立っており、新庄町では川面に映る自分の姿を見たといわれる橋に「茨木童子姿見の橋」の石碑が立っているという。

栃尾市で中学校の美術教師をしている佐藤秀治氏に『軽井沢茨木童子伝承』という大著がある。氏はその後、この本を元に『鬼の系譜』（文芸社 2004）を著した。

ここでも酒呑童子と茨木童子の共通点が多く見られる。その一つが母親の胎内に十六ヶ月も長くいて、生まれた時に既に歯が生えていたというのである。一般的には九ヶ月三十六週が普通であるのに、一年四ヶ月も胎内にいれば、歯が生えるのも無理はない。

その二つ目は、大変な美男子で多くの女性から恋文が殺到したというのである。女の情念が鬼の姿に変えたというのであろうか。なぜ女の情念が固まり、鬼に変身しなければならなかったのか。

『温古之栞』では、酒呑童子は、少年の頃、栃尾の茨木童子と一緒に岩屋に住んでいたと書いてある。茨木童子は、後の京都の大江山に逃げ込み、酒呑童子の手下になった。二

人はこうして早くから結びつく運命のもとにあった。

三、弥三郎婆

西蒲原郡国上村字中島の畠中に、方三間ほどの荒地がある。老樹も一二本生えていて何となく由来ありげの跡である。

伝説に、此処は、昔弥三郎と云ふ男の住居であったと。弥三郎には一人の母があった。母は弥三郎を至極親切に可愛がってくれた。併し里人は其母が毎晩外へ出ては、奇怪な悪業をなすと噂した。と言って誰一人其実際を見た人は無かった。弥三郎は獵師であった。毎晩網を持って此辺の森、彼辺の林へと鳥を捕っては家へ帰った。或晩の事であった。弥三郎は何時もの如く仕度をして出た。出は出たものの何となく気分が勝れなかった。弥三郎はまた明晩もあることなればとて、其の戻戻ってきた。其の時突然後ろから弥三郎の頸筋を掴み、引き立てて行かうとするものがあつた。弥三郎は豪勇の男であつた。直ぐ腰にした鎌で其の腕を斬つた。

家に帰ると母は加減が悪いとて、寝間に一人で臥していた。そして今日の早帰りを詰るやうにしてたづねた。弥三郎は母の驚くを気の毒に思ひ、さりげなく言葉を濁した。

其の翌朝であつた。母は却々に寝間から出てこない。何うしたことかとたづねれば母の姿は見えない。不審に思つた弥三郎は其処此処探した。すると、寝間から戸口へかけ、鮮血が滴っていた。驚いた弥三郎は、其の血の痕をたずねいたら、到頭昨夜自分が怪物を斬つた場所へ出た。さては、我が母は鬼女であつたかと其の時始めて弥三郎は覺つた。

其の後、弥三郎は其の土地を去つた。去つた跡へは、何人も住むものは無かつた。弥三郎は、夫から何処へ行つても、人になづまれなかつた。其の度毎に弥三郎は、住所を変えた。西蒲原に弥三郎の屋敷跡だと云はるる所が此処彼処にあるのである。『伝説の越後と佐渡』中野城水 大正12

彌三郎婆さん

彌彦山の麓に、彌三郎といふ綱使ひがゐた。毎日田圃で鳥を捕へて齡取つた婆と二人暮らしてゐた。或る日のこといつものやうに綱を使つてゐると、おういんが四匹出てきたので、彌三郎は逃げて松の木の上へ攀ぢ上つた。狼たちは、いくら木の上へ逃げたつて逃がすものかと云つておういん繋ぎをはじめた。狼は次々肩の上へ上つて今にも彌三郎へ届きさうになつたが、一番下のおういんが腰が利かないせいかどたと重り合つて倒れてしまつた。何遍もやつてみたがおういん繋ぎがうまく行かないので、「今日は駄目だ、彌三郎さんを頼もう」といつて一匹のおういんが飛んで行つた。彌三郎が彌三郎婆さんと云つたらうち婆さだが、はて不思議だなど思つてゐると、俄かに西の方からごんごん大荒れがやつて來た。そして黒い雲が彌三郎を包んだ。これは大事だと思つてゐると雲の中から大きい手がぬつと出て彌三郎の首筋を掴まへた。彌三郎はやけになつてその手を押へて、腰に差

してあつた鉦で力ませにぶつた切つた。血がだらだら下へ流れる。それを見ておういん共は叶はん叶はんと云つて逃げて行つた。そして大荒れも止んだので、彌三郎は切り落とした針金のやうな毛の生えてゐる腕を持つて家へ歸つた。「婆さ今歸つたで。今日は鬼の腕を取つて來た」と云ふと、奥の室に寝てうんうん唸つてゐた婆さが「どれどれ早う持つて來て見せてくれ」といふから彌三郎が婆さの寝てゐる室へ持つて行くと、婆さは忽ち鬼婆の姿を顕はして、いきなりその腕を取つて「これは俺の腕に違ひない」といひながら血がだらだら流れてゐる自分の腕の切口にくつ着けて逃げて行つた。彌三郎はあつけに取られて見ていたが、やがて婆さの床の下をめぐつて見たら、鳥獸や人間の骨が積み重ねてあつた。鬼婆が彌三郎の婆さを食つて、婆さに化けてゐたのだといふことである。

『加無波良夜譚』（昭和7年 玄久社 文野白駒）

昔、八海山麓の村に、彌三郎という獵師がいたが、ある時、山に猟に入ったきり帰らず、父の後を継いだ息子も妻を娶り、女の子をもうけたが、父同様吹雪の山から帰らなかつた。息子の妻は悲嘆の余り、前後の見境もなく、川に身を投げ、乳飲み子と婆だけが残された。婆は村中にもらい乳を続けたが、「あそこの家は代々殺生をしてきたので、罰が当たつたんだ」等と噂が立ち、もらい乳も断られるようになった。暮らしの道を失い、腹を空かせて泣く乳飲み子を抱えて途方に暮れた婆は、ある日、孫に添い寝し、哀れさに頬ずりすると、孫は、餓死して冷たくなつていた。愕然とした婆だが、同時に空腹に耐えかねていたためか、婆の齒は、知らず知らずに孫の頬に突き刺さつていた。人肉を喰らい、鬼女と化した婆は、神通力を得て、権現堂の岩穴に住み着き、吹雪に乗つては天空を駆け巡り、幼子を攫つては、むさぼり喰らつた。麓の村々のむさがる子供は「ほら、彌三郎婆がくるぞ」と脅され、吹雪に鳴る障子の音に怯えながら寝入つた。以来、約八十年、悪行を重ねた鬼女彌三郎は典海大僧正に会い、諭されて改心、「妙多羅天女」の称号を授けられるや一転、前罪を悔い、心清らかな子育ての神になつて、人々に尽している。

（旧大和町麓神社の紹介文から）

藤田治雄氏に「彌三郎婆伝説の基礎的研究」（かみくいむし第68号）があるが、県内三〇の伝説地があるという。この分布は越後に限らず、近辺にも広がっているが、越後の分布が圧倒的である。氏によれば、彌三郎婆を紹介する文献は、江戸文化年間の『北越奇談』に「伊彌彦の鬼女」として紹介されて以来、七十五編にも上るといふ。高橋郁丸さんのインターネット「ヤサブロバサをめぐる一考察」にはこの他、柏崎市久木太、下善根、折居北向、見附市葛巻、旧山古志村虫亀、上越市東本町、旧吉川町大賀、旧安塚町牧野、十日町市、旧六日町麓、旧広神村などを紹介している。

ここで、斬られた腕を取り返しに来る彌三郎の婆さと、茨木童子に共通点がある。空を自由に飛ぶ姿は、後に紹介する黒鳥兵衛の首にも似ている。

四、黒鳥兵衛

黒鳥兵衛は、前九年の役（一〇五一〜一〇六二）で八幡太郎源義家に敗れた奥州の豪族、安倍貞任・宗任の部下で、源頼義・義家らに攻められて、越後へ落ち延びてきた、史実の上では現れてこない伝説上の人物である。

黒鳥兵衛については、『越後村名盡』に載っている。私の手元には、昭和三十三年 山下隆吉校訂 新潟市船江郷土談話会発行のガリ版刷り複製本がある。原本になったのは、「天明七年花岡五代の九弟 宗奉書之」の署名がある写本を新潟区の書記素行堂早川清作氏が明治十八年に再写した県立新潟図書館所蔵本を定本にしたという。

黒鳥兵衛は、酒呑童子や茨木童子、弥三郎婆さんとならべて、鬼に仕立てるのは、いささか疑問があるかもしれない。確かに歴史の上で現れない人物といっても、相手の阿部貞任・宗任、加茂次郎・源義家は、れっきとした歴史上の人物である。にもかかわらず、この人物を鬼とするには、幾つか前述の酒呑童子や弥三郎婆さんと共通点がある。

- 1、妖術を使って人々を苦しめた
- 2、掠奪・放火・殺生などを繰り返した。
- 3、首が高く空を飛んで怪鳥につき落とされた。
- 4、青鬼間道の墓は、鬼の墓と呼ばれている。

以上のことから考えて、黒鳥兵衛は、鬼と考えて間違いはなからう。

黒鳥兵衛は、身の丈八尺（二四〇^サ）怪力の上に妖術を心得る豪傑で井地峰（現新発田市五十公野）に城を構えていた。この黒鳥が手下真鳥次郎、亀田三郎、横越軍治らを引き連れて放火、掠奪、殺傷などを繰り返すので、弥彦の桜井宗方、金菅城の羽生田周防守が防戦に努めた。しかし、黒鳥軍に大敗した。都の応援をもとめ、朝廷は北畠中将時定を遣わした。時定は、国上城に居を構え、激しい戦いが続いたが、総崩れして、戦死した。その時、佐渡に流されている、義家の弟義綱を迎えて黒鳥を撃つと言いつた。時は永長元年（一〇九六）義綱は寺泊に上陸して、黒鳥を撃つ機会を待っていた。こうして義綱軍と黒鳥軍の激しい戦いとなった。長治二年（一一〇五）義綱は、鰯潟に陣した黒鳥の部下亀田三郎と戦った。

黒鳥はこの時、妖術を使って真夏に雪を降らせたが、義綱軍は、木の枝でカンジキを作り、これに応戦した。このカンジキは鶴が木の枝をくわえてきたことからヒントを得たものだった。義綱の射た矢が黒鳥の脇腹から胸板を貫き、黒鳥も最後の力をふりしぼって矢を放ち、それが義綱の脇腹を貫いた。黒鳥はわが最期を見よと、自らの首を切り落とすと、その首は天高く飛び上がるが、弥彦の山から怪鳥が飛んで来て、この首を蹴落とした。この首が落ちたところが黒鳥の地名になったという。義綱もまた黒鳥の矢で受けた傷がもとで死んだ。その墓は、加茂市八幡の西光寺に葬られているという。黒鳥兵衛は、山形県鳥海山で妖術を学び、その近辺にも兵衛に關した「鬼清水」や「鬼坂峠」などの地名となった。県内各地に黒鳥兵衛やその手下に關した様々な地名が残っている。

黒鳥兵衛に關係した地名は次の通りである。

新発田市五十公野 五十公野城 黒鳥兵衛の根城

新発田市西宮内

黒鳥の手下 青鬼間道の塚がある。兵衛はこの地で義綱の強弓に射止められたという。

旧加治川村住田

黒鳥の手下 青鬼間道の根城。三方を山に囲まれ、間道を攻め倦んでいた義綱は、兄義家の夢のお告げで湿原をカンジキで攻めて間道を討ち取った。

旧横越町

黒鳥の手下 横越軍治の根城

五泉市能代

黒鳥の手下 真鳥次郎の根城

旧亀田町

黒鳥の手下 亀田三郎の根城

新潟市鳥屋野

黒鳥の手下 鳥屋野悪五郎の根城。悪五郎は大力で女池紫竹山方面から土囊いっぱいの土を詰めて運んだが、目から零れ落ちた土が小高い丘になった。

新潟市洲崎

黒鳥の手下 外ヶ浜牛兵の根城

新潟市女池

黒鳥の手下 女池頓蔵の根城。頓蔵石仏山にこもって賭博開帳するところに、義綱進撃して来たので、柵を作って防ごうとした時、石仏を埋めてしまったという、

旧巻町間瀬

兵衛の妻まつ之父。兵衛の義父間瀬看幽の根城。

田上町護摩堂山

黒鳥を迎え撃った金菅沢城 羽生田周防守吉豊の城主の根城。鳥屋野悪五郎は、羽生田の妻秋篠に酒の相手をさせる。酔った悪五郎の首を秋篠が掻く。

彌彦村

桔梗城 黒鳥を迎え撃った桜井宗方の根城

三条市

京都からやってきた三条左衛門の根城。京都からやってきた三条の妻に船頭が「城が落ちた」と嘘をいい、妻は川に身投げして死ぬ。

出雲崎町

出雲崎城 黒鳥を迎え撃った山本次郎左衛門の根城

分水町国上

都から来た北畠時定中将の根城

弥彦村観音寺

黒鳥軍に撃たれた北畠の遺体を埋めた場所。持っていた守り本尊聖観音を安置した

弥彦村矢作

佐渡から黒鳥討伐に呼び寄せられた加茂次郎義綱が身を潜めていた場所

旧村松町長橋

羽黒神社 鳥屋野悪五郎に撃たれた羽生田周防の守。その妻秋篠が夫の首を祀ったところ。

黒鳥兵衛の関係する地名は、越後のほぼ北半分中越北から下越に広がっている。中越では、出雲崎・三条が南端である。

五、雪女

鈴木直氏の『越後の国雪の伝説』「雪女 一」に次のような話が載っている。長い話なので要約して紹介してみる。

魚沼銀山平に吾作という二十歳の青年が父親と二人で暮らしていた。母は吾作が三歳のとき病気でなくなつた。ある年の瀬に吾作は、父に代わって川漁に出かけたが、途中で天候が急変して猛吹雪になつた。日が暮れて遠くに明かりを見つけて歩いてゆくと一軒の小屋が目に入った。小屋には、若い女が一人いた。女は、ここで会つたことを人に言うなといって外に出て行つた。翌日は晴天で吾作は家に帰つたが、昨夜のことは父親に何も話さなかつた。それから三年山仕事の帰り道、夕方一人の女に会い、家に連れてきた。女は、お雪と名乗り、日光にすむ遠縁のものを訪ねて行く途中だつたと話した。翌日から雪がひどく女は、吾作の家にとどまって、家事を手伝ってくれた。その後も、女はこの家にとどまり、その間に父が死に、人が勧めて吾作は女と夫婦になつた。二人の間に三人の子までできたが、お雪はその美貌がいつまでも衰えなかつた。雪の夜、お雪に六年前雪の山中であつた女のことをふと漏らした。その女がいまのお雪にそっくりだつたと話した。すると突然、お雪の態度が変わり、自分はこの時の雪女だと告白した。あのとこのことを話すと、命はないといつていたが、かわいい三人の子があり、命はお預けするといつて出て行つてたしまつた。

以上が「雪女」のあらすじである。吹雪の夜、山中であつたことを口外するなといつて、吾作の嫁になつたお雪は、子供ができてからもそのタブーを破つた吾作を捨てて、消えていった。恨みの人生であつた。山中の山小屋のお雪は、姿こそ人間になつていながら、山姥だつたのだ。その山姥が人間の仮姿に変えて吾作の嫁になつた。考えようによつては、吾作の監視役だつた。自分の姿を口外するのではないかと監視する為に吾作の嫁になつた。「鶴の恩返し」や「鯉女房」などと同じように、雪女も押しかけ女房であつた。にもかかわらず、最後には、この夫婦は破綻する。たかが、六年前に山中であつたことをふと漏らしたという罪で、鶴の恩返しでは、機織姿を覗くなどというタブーを破つたために去つていかねばならなかつた。「鯉女房」は食事を作る場面を見てはならぬというタブーを破つて破綻した。心の闇、人の奥深く秘密を暴いた罪は重い。もう一つ「巻幡山の怪女」のあらすじを紹介しよう。

昔魚沼郡大木六村に弥右衛門という庄屋がいて、山で猟をしていた。ある日、狩に出掛け弥右衛門は道に迷つてしまつた。明りを頼りに一軒に家に入ると、美しい女が一人で機を織つていた。弥右衛門は、一夜の宿を請うと女は家まで送るから背中におんぶするように言い、途中で目を開けることを禁じた。女は弥右衛門を背負うと、鳥のように空を飛ぶので、弥右衛門が恐る恐る目を開けてみると、女は角の生えた竜神だつた。玄関で降ろされたが、それから弥右衛門の目が潰れてしまつた。女は巻幡山の竜神だつたという。

ここには、雪女とっていいないが、明らかに鬼となった雪女である。タブーを課すところなどに現れている。弥三郎婆とおなじように空を飛翔している。

六、鬼を育てた風土

いったい鬼とはなんだろう。百科事典には次のような記述がある。

空想上の靈怪。醜悪な形相と自在な怪力によって人畜に危害を与える怪物と考えられた。鬼の観念は、仏教における鬼神夜叉、餓鬼地獄の閻魔王の配下などを具体化したものといえる。日本における鬼は、『古事記』のなかの黄泉醜女という隠形の鬼に始まり、時代や思想の流れとともに変化していった。一般に鬼が人畜に与える危害は、陰陽道、仏道修行、経典によって退けられると考えられている。

一方、これら観念上の鬼とは、異質なオニが民俗上信じられている。これは山人、大人、などと同じ性格のオニが山中に住むというもの、「鬼の田」や、「鬼の足跡」という窪地があったり、山中のオニと親しんだ昔話が伝えられている。村人が山中に住む人々と接触して得た知識によって、オニを山の精霊、あらゆる神を代表するものという思想が生れたと考えられる。(ブリタニカ国際大百科事典)

もちろん、鬼は越後だけでなく、日本中のあらゆる場所に、出現する。例えば、福島県二本松市の安達ヶ原の鬼婆などはその代表ともいえる。能登半島にあって、海に面しない石川県柳田村に伝わる猿鬼伝説なども鬼が出て、村を次々に襲った。鬼の出現を越後に特定することには、無理があることは承知している。それにも、越後の鬼伝説は他方に比べて多すぎないだろうか。越後にはなぜこうした鬼伝説が多く生れてきたのであろう。

それについて私は次の理由を挙げてみる。

① 隣接県との間に存在する高山の連なり

越後は周囲を高山に囲まれ、陸路をどこに出るにも高い峠を越えなければいけないところに位置する。日本海に面した広い海岸線は、鬼の出現には背を向ける。鬼は山中に住む山の精霊であるならば、高山に囲まれた越後に鬼が育つのは、尤もなことである。弥三郎婆は、村里に住めず、山の洞穴を住居とした。弥三郎婆さは山の民であった。酒呑童子や茨木童子も生れは必ずしも山とはいえないが、拠点は大江山であり、国上山であった。

② 越後平野に点在する湿地帯と潟湖の存在

東北俘虜の血を引く黒鳥兵衛の活動の場は、越後蒲原平野の潟湖周辺だった。この湿地を自由に使って大和朝廷から派遣された加茂次郎義綱や、北畠時定を苦しめた。

迎え撃つ地元越後勢は、湿地に枝をならべたカンジキで使ってこれを乗り越えた。カンジキは雪国越後に住む人の生活の知恵であった。越後平野の潟湖がなければ黒鳥はこのように縦横無尽に動けなかったであろう。潟湖の存在こそ鬼を育てた滋養になっただけだ。

③ 雪深い越後の風土

半年深い雪に埋もれる越後の風土は、人々を精神の世界に向かわせる。吹雪とともにやってきて、人の命を狙う雪女は、雪鬼である。どれだけ、この雪に人々は命を失ったことか。吹雪の晩弥三郎婆さは、空を飛んでやってくる。情念が雪の世界で凝り固まって鬼に変身するのである。

④ 東北の縁に存在して都から遠い

今道州制が検討されていて、新潟県が、どのブロックに属するのか議論されている。新潟県は東北なのか、北陸なのか、関東圏なのか、どちらの顔をも併せ持っている。越後は、古来からとらえどころのない鶴のような存在だった。どこを向いているかわからない存在だった。そこに鬼の存在が浮き上がってくる。古来より、岩船の柵、沼垂の柵のように大和朝廷の東北俘囚への前線基地が置かれていた。阿賀北には言葉や風習に東北の影響を色濃く残している。新潟県は東北の文化と関東・北陸の文化の大接点だった。かつて旧東蒲原郡は明治十九年まで福島県だった。東北には俘囚とよばれる人たちが住んでいた。俘囚については古代律令国家に服属した蝦夷とか蝦夷に従属された大和朝廷民族とか様々な説があるが、いずれにしても越後はそうした異民族意識の人の住む東北と境界を接していた。その混沌の中から鬼が育てられた。

七、まとめと少しばかりの考察

平成十八年九月二十五日付新潟日報「窓」に神林村の佐藤正という人が次のような文を投稿していた。

越佐に悪魔神怪の類が多く住むのは理由のないことではない。海の方こうに外国を臨み、金の産地という陽の面と、流刑の地という陰の面を持つ佐渡、その島への唯一の渡しであり、雪に閉ざされ、あるいは金の稲穂を実らせる越後のケシオシック（混沌的）な文化は、世阿弥や安吾といった芸術家たちのにひらめきを与えた。語り継がれる伝説は多様な文化と自然から生れるものだから、本県は妖怪の名産地、芸術の王国である。

と氏はいう。越佐の妖怪のケイオシックな文化が芸術家たちのひらめきを与えて多様な文化を生み出す土壌となったというのである。「鬼を育てた風土」越後は、その鬼で豊かな文化のみなものになったのであろうか。それを肥しとして多彩な文化を育てたのであろうか。しかし、と私は思う。

先の佐藤秀治氏は、言う。

越後国司池田中納言をはじめ、貴族たちは当時の荘園制度の中で実に過酷な国主たちであり、厳しい税の取立てで民衆から忌み嫌われていた。その越後には伝説があつて鬼がいた。すなわち酒呑童子である。その鬼が大江山に来て、酒呑童子に池田中納言の税の取り方がひどいことを告げた。酒呑童子はそれを聞いてけしからぬとばかり、池田中納言の娘を奪つたのである。したがって鬼というのは、苛酷な貴族たちに対する貧しい庶民の怨念の結集物であり、想像の産物であつた。そして実際に存在した山神や竜神を奉る山岳信仰者に仕立て上げ、総体として酒呑童子を代表とした鬼集団を設定して、退治劇を演じて見せたものと言える。『鬼の系譜』 121頁)

酒呑童子は、中央の政権への反撃だつたと位置づける。確かにその通りであろう。

鬼は人間の心の闇の部分が顕在化したものである。越後人は従順で、人がよく、働き者という評判である。どちらかといえば、長いものにかまれろという体制に忠実に、新しいものに抵抗感を持つ。南北朝時代に、時代の動きを察知できず、南朝方につき、一時花々しく動き回つたが、滅んでいった。北朝勢力に頑強に抵抗を示したのも越後であつた。そして、幕末にも、西軍優位の時代の風潮を捉えられず、武士のプライドを保つ為に長岡藩河井継之助は、戊辰戦争に殉じた。古い思想にとらわれていた越後人は、新しい時代の流れに掉さすことが出来なかつた。

しかし、大塩平八郎の乱に準じた生田萬(1)の乱が柏崎に起き、大正時代の木崎村小作争議が越後に起きた。大竹興茂七(2)、岡村権左衛門(3)、河本杜太郎(4)、内山愚堂(5)、平出修(6)、平沢計七(7)などは、越後で育つて、時の権力に刃向かつた人物である。表面的には権力に従順で、支配層にとっては、これほど支配しやすい人は無いだろう。しかし、それは、基層のどろどろした情念を燃やしていて、それがあるとき、火山の噴火のように噴き上げる。むろん権力へ刃を向けるもの全て鬼とて意義付けることには、無理がある。反権力者をすべて鬼としては、失礼極まりない。美貌で男をうっとりさせる雪女の裏面には、タブーを破つたものに情容赦なく命を奪う恐ろしい裏面を併せ持っている。人間の心理の奥底に心の闇として存在して、時にそれは、鬼のような醜悪な形で表面化する。それが中央権力への抵抗の一つの形である。鬼を育てた風土、越後とは、そういう風土である。

戦国時代の武将直江兼続をモデルにした火坂雅志著小説『天地人』の中で直江兼続が媚政重に説く場面がある。

「つらい冬を、じつと耐えて春を待つ。ゆえに、雪国の者はおのずと我慢強くなる。いかなる試練にも、おのれを殺して耐え抜くことができるのだ。……だが、それは雪国の人

間がただおとなしいということではない。一見、従順のようだが、心のそこには熱い炎を秘めている。いざとなれば、その炎が雪を溶かし、外へ向かって激しく吹く出すことがある。」

注1 いくたよろず 天保年代、柏崎の私塾塾長 米価の高騰に抗議して乱を起こしたが、失敗に終り自殺する

注2 おおたけよもしち 江戸時代中期、旧中之島村の義民。庄屋の圧政を主張したが入れられず、死罪となった。

注3 おかむらごんざえもん 江戸時代寛政年間の旧越路町浦の庄屋。長岡藩地領地替えの重税に抗議して強訴するが、打首獄門となった。

注4 かわもととたろう 幕末十日町市出身の勤皇志士。坂下門外で老中安藤信正を襲うが、失敗、傷ついて死ぬ。

注5 うちやまぐどう 大逆事件で刑死した社会主義者。僧侶。小千谷市出身。天皇暗殺を企てたとして検挙され、明治四十四年の処刑された。

注6 ひらいでしゅう 明治時代の弁護士・歌人・小説家。新潟市出身。大逆事件の弁護を担当して、石川啄木・森鷗外の思想に大きく影響した。

注7 ひらさわけいしち 大正時代の労働運動家。小千谷市出身。関東大震災後の亀井戸事件で警察と軍隊に虐殺された